■足利直義　　武将。初期室町幕府の執政者。１つ年上の兄尊氏と対照的な性格で，必然的にライバルとなった。
あしかがただよし
・・・・・・1306＝　　生。足利尊氏の1歳違いの弟。父貞氏，母は尊氏と同じ上杉頼重の女清子。

・・・・・・1315＝ **9歳：**

後醍醐天皇・1318＝12歳：

正中の変・・1324**＝18歳：**

北条氏外執権1326＝20歳：兵部大輔，

左馬頭を経て相模守，左兵衛督となり，住宅のあった京都の地名から三条殿，錦小路禅門などと呼ばれた。

元弘の変・・1331＝25歳：元弘以来，兄尊氏と行動を共にし，

鎌倉幕府滅亡1333**＝27歳：*尊氏とともに北条氏に反旗を掲げ六波羅を攻撃。建武政府成立後まもない，成良親王を奉じて鎌倉に入り，恩賞として関東10ヵ国を管領，新政府内で冷遇されていた足利氏にとって有力な地域的拠点となった。**
二条河原落書1334＝28歳：右兵衛督。
中先代の乱・1335＝29歳：中先代の乱が起ると，預けられていた護良親王を殺害して鎌倉を逃れ，東下した兄尊氏の軍勢と合流して鎌倉を奪回。このとき直義は，後醍醐天皇の招きによって上洛しようとした尊氏をとどめ，また尊氏から政務を譲られたという。その後尊氏とともに，新田義貞の軍を箱根に破って面し，破れて九州にのがれた。
南北朝分裂・1336＝30歳：再起し，光明天皇を擁並して幕府を開く。この幕府では，御家人を統轄して軍事指揮権を掌握した尊氏と，裁判を中心として日常的な政務を執行する直義との間に，権限の分割が行われていた。この二頭政治は，大らかで物事にこだわらない尊氏と謹厳実直で理性的な直義の性格の違いにも適応し，成立期の困難な幕政の運営に効果があった。直義は北条泰時の時代を理想とし，足利一門および旧幕府の法曹官僚を指揮し，最高決裁機関である評定会議に親臨し，安堵方・引付方(内談方)・禅律方・官途奉行などを掌握して，政務を有効に処理した。直義は尊氏とともに夢窓疎石に帰依したが，その門流を中心に五山十刹の制度を定め，諸国に安国寺・利生塔を建立したことも，直義の計画といわれている。直義の幕政運営は守護級の大領主や寺社本所勢力の支持を得たが，畿内・近国の新興領主層および足利氏根本被官層の反発を招いた。こうした複雑な領主層の対立に，尊氏の庶子で直義の養子となった直冬の中国探題派遣問題がからまり，***秩序維持派の直義党と新興領主層を組織した執事高師直派の対立関係が次第に表面化，**
五山制定・・1342**＝36歳：**
・・・・・・1344＝38歳：従三位。
直義は当時の華美で破格を好む"ばさら"風俗に強い嫌悪感をもち，所領政策上も法や証文を重視し，鎌倉以来の伝統的な権利体系を尊重したため，貴族や寺社，さらに豪族的な武士団からは歓迎されたが，反面実力によって新しい秩序をつくり出そうとする，主として畿内周辺の新興武士団などからの反発をうけた。そのような反直義派の頂点にあった高師直との対立は激化し，
基氏鎌倉公方1349＝43歳：実子が誕生。**_直義は尊氏に迫って師直の執事職を罷免させたが，師直がクーデターを起したため，直義は幕政統轄者の地位を尊氏の嫡子義詮に譲り，疎石を戒師として出家した。しかし九州に逃れた直冬をはじめとする直義党の動きが活発となり，天下三分の形勢があらわれた。師直のクーデタによって直義は政務から追われ，出家して恵源と名のった。しかし養子直冬の九州における活動をはじめ各地の直義党は健在で，**
観応の擾乱始1350＝44歳：***直義は大和に挙兵，南朝との講和，尊氏・師直の分離策などを成功させ，師直を殺して政務に復帰。しかしそれも長つづきせず，**
・・・・・・1351**＝45歳：**この年，実子が八幡旅所で夭折。北陸に走り**_再び両派の戦闘が始まり，**
観応の擾乱終1352＝46歳：***師直の一党を討つことに成功した。こうして直義・義詮の共同執政の形式で，実体として直義政治が再開されるが，尊氏派との対立は解けず，再び京都を出奔し，斯波高経・桃井直常などの勢力圏である北陸に走った。この北陸行には，桃井・斯波・畠山・山名などの武将をはじめ，吉良満義・上杉朝定・長井広秀・二階堂行直・問注所顕行などの評定衆・頭人・奉行らがほとんど参加し，儒学者の日野有範・言範なども従っており，直義政治の担い手をここにみることができる。その後尊氏との間に幾度か和議が交されるが成らず，直義は各地で戦いながら上杉憲顕の待つ鎌倉に入る。しかし南朝と講和を結んで東下した尊氏軍との決戦に敗れて降伏。直義は敗れて鎌倉で死んだ。尊氏に毒殺されたとの説が伝えられる。**

「没年日本史人物事典」，「人物日本歴史館」，「日本の群像」，平凡社百科事典，